

# 芸大通信

2006年1月発行  
Vol.004

京都市立芸術大学広報誌

KUJANEN

## CONTENTS

- 美術学部・ホームページの改訂にあたって
- 美術学部・大学会館情報スペースの機器更新について
- 音楽学部・コンピュータミュージック室の設備更新
- 日本伝統音楽研究センター・日本伝統音楽研究センターのネットワーク整備
- 芸術資料館・ホームページ開設について
- 美術学部・教員の紹介
- 音楽学部・教員の紹介
- 日本伝統音楽研究センター・教員の紹介
- 美術学部・教員の紹介

## ホームページの改訂にあたって

美術学部助教授 辰巳明久



2005年の秋に京都芸大のホームページを改訂いたしました。今までのホームページは、1995年という日本のインターネット黎明期に物理学の藤原隆男教授の個人的なご尽力により作られました。芸術系の大学では最も早い時期に京都芸大ではホームページを立ち上げていたということです。その後、藤原先生をはじめ本学情報スペースの非常勤講師の先生方のご尽力でホームページは維持運営されてまいりました。人員や予算の配分ができず藤原先生や非常勤の先生方への多大なご負担をかけた形で何とか維持してきたというのが実情でした。

今回の全面改定は、情報管理主事の清水漸先生と総務の相宗さんを中心に作業が進められました。仕上げの段階からは、藤原先生、彫刻専攻の中原浩大先生、そして造形計画の井上明彦先生、そして幾人かの先生方に緻密な作業をしていただき完成いたしました。私は、当初の企画のみを担当させていただき、あまりお役に立てませんでした。

社会の中でホームページから必要な情報を得ることが年々多くなってきていることは言うまでもありません。印刷媒体やテレビ、ラジオなどの既存メディアにホームページが加わり、社会の中でのメディアの役割分担が変化してきていることは、生活の中でも実感するところです。

私の専門はブランディングなどの情報デザインですが、近年消費者の購買に至るプロセスを調査すると、ホームページから情報を得てからアクションするケースが非常に勢いで増加していることがわかります。モノを買うことだけでなく、学校の情報を得る手段としても、ホームページが最も重要なメディアとなっていると思われます。このような状況下、本学のホームページが改訂されたのは喜ばしい事だと思います。

このように急速に変化する社会の中で、ホームページだけに限らず、本学の広報活動全体の見直しが必要なのではと思うのですが、安易なアピールをするのではなく、本学が本質的に持っている内容のあるリソースを効率よく発信していくにはどうすべきか、この後も継続した議論が必要だと思います。

## 大学会館情報スペースの機器更新について 美術学部教授 藤原隆男



情報スペースは、大学会館2階の大部分を占める



演習室は、演習授業や自由制作に使われている



3次元CG制作と映像編集のための映像室



画像室は、いまはメディア室として使われている

1994年に竣工した大学会館の2階の大部分を占めるのが情報スペースである。情報スペースは全学の共同利用施設として、サーバ類を管理して学内のネットワーク環境を維持するとともに、情報機器、映像機器、音響機器を設置して、学生と教員の教育・研究のための環境を提供している。大学会館竣工当時は、情報機器が制作の道具として日常的に使われるようになってきた時代であった。本学でも情報機器の要望が急速に高まっており、機器の台数がある程度用意して授業に利用し、また研究室レベルでは導入が困難な機器を学内で共有するための施設ができたのは、時機を得たことであった。

また、機器の導入に際して、5年ごとのリースが認められたのは画期的なことであった。コンピュータの処理速度は5年で10倍になる。メモリやハードディスクの容量の増え方をもっと激しい。機器が5年ごとに更新できることで、その能力の問題の解決だけでなく、使い方の変化に応じた柔軟な機器構成も可能になるわけだ。今回、機器リニューアルを昨年度末に終えて、第3期のシステムによる運用が軌道に乗ってきたので、新しくなった情報スペースを簡単に紹介したい。

情報スペースでいちばん広い部屋が演習室である。ライセンスを取得した学生に開放されている。この部屋では、芸大で使用頻度が高い Macintosh と世間で普及している Windows をそれぞれ20台置くという難題を、モニタを共有することで解決した。コンピュータ演習や教職のための授業のほか、各専攻の授業や学生の自由制作に使われていて、稼働率の高い部屋である。演習室の一角には、カラーレーザや大型インクジェットなどの各種プリンタと、大型プリンタ出力用の Macintosh が置かれ、出力センターとしての役割も果たしている。

となりの映像情報処理室は、3次元CG制作のための10台余りの Windows と、ハイビジョン映像の編集のための Macintosh が置かれ、映像制作に活用されている。その向かいの画像情報処理室には、サウンド編集のため6台の Macintosh とMIDI機器が置かれ、現在はメディア室として利用されている。このほか、作曲の授業や制作に使われているコンピュータミュージック室と、主として音楽学の学生の研究に使われている音響情報処理室がある。

今回の機器更新でとくに配慮したのが、ビデオカメラやデジタルカメラなど、各研究室に使ってもらうための携帯型機器の確保であった。内規を作って運用を始めたところたいへん好評であるが、情報スペースの運営を担っている非常勤講師の事務作業量が増えているので、各研究室のご協力をあらためてお願いしたい。

情報スペースは、非常勤講師の多大な努力のおかげで、学生や研究室の多様な要求に対して柔軟に対応でき、日本でもトップクラスの施設として機能していると自負している。機器が新しくなって学生たちが待ちかまえていたようにやって来るため、いま情報スペースは大盛況である。コンピュータのメモリやハードディスクを增強し、ソフトウェアをアップデートして、学生たちが使いたがる環境をつぎの更新までどう持続するかが、今後のむずかしい課題である。

## コンピュータミュージック室の設備更新

音楽学部非常勤講師 川崎博史



コンピュータミュージック室にはライセンスを取得した学生に解放されたシステムが6組ある



キーボードは開設当初からの電子ピアノ



6台のシステムから共有できるシンセサイザは開設当初の機械。光バッチベイは新たに設置された。



アナログ・オーディオのオープンリールデッキは標準接続に復活。レコードプレーヤは新設された。プレーヤの下は24chハードディスク・レコーダ。

大学会館の情報スペースには音楽学部の施設のひとつとしてコンピュータミュージック室があります。

コンピュータミュージック室はミュージック・コンクリートの作品やMIDIなどによるコンピュータミュージックの製作スタジオとして、平成6年に完成した大学会館2階の情報スペースに設けられました。現在も平成7年5月より施行されている使用細則に基づいて使用されています。そこで製作されたミュージック・コンクリートなどの作品は年間2回、6月と12月の第2火曜日に大学会館のホールで催されるコンピュータ・ミュージック・コンサートで発表されます。またコンピュータ・ミュージックは音楽学演習C1・C2で取り上げられています。

コンピュータ・ミュージック室の設備はコンピュータ・システムと音響機器から構成されています。10年前の開設当初に比べるとコンピュータの性能の進歩は目覚ましいものがありますが、その進歩に比べると音響機器の技術的な進展は比較的緩やかであるといえます。またMIDIの規格は開設当時からコンピュータの技術的な展開に合わせたインターフェースなどが追加されましたが、それらの機能は5年前に更新した機器で対応されています。今回の設備の更改では予算的な制約があつてシステムに使用されているすべての機器を更新することはできませんでしたが、実用上製品化されている最新の機器と遜色のないものは継続して使用することにしました。

コンピュータの性能の進歩は、処理速度の向上と記憶装置の大容量化にあります。また外部記憶としてのメディアはCD-Rが定着し今後DVDへと発展しつつあります。DVDの対応は、現状ではメーカー間で統一規格を作り出す段階には至らず音楽CDの新しい規格も検討されています。今回のリニューアルでは従来のまま(分解能: 16bit/サンプリング周波数: 44.1kHz)で次回の機器更新まで対応することにしました。CPUとしてはより経済的なWindowsマシンへの変更も検討しましたが、従来のソフトウェアや過去に製作された作品との互換性があることやメーカーの方針が音楽系ソフトウェアにおいてWindows系との差別化戦略をとっていることなどを考慮してMacintoshを採用しました。

コンピュータ・ミュージック室ではライセンスを取得した学生に解放されているシステムが6組あります。今回のリニューアルでは5年前の更新時に開設時の機器から再構築されたシステムを踏襲しながら、コンピュータ本体をiMacからG5へグレードアップし、従来の4ch・MOレコーダを16chのハードディスク・レコーディング装置に交換しました。音響技術ではこの5年間にデジタル録音の媒体としてハードディスクが一般化しています。今回は音響機器の録音装置として24chのハードディスク・レコーダを新たに追加しました。また携帯型メモリレコーディング機器を追加、コンデンサ・マイクロフォンも準備しました。

ネットワークでは6台のコンピュータから共有できるファイルサーバを新たに設置し、従来MOなどのメディアを利用していたファイル管理を一元化できるようにしました。更に多様化する各種メディアに対応できるようにメディア・インターフェースを充実して、システムを管理するノートパソコンを追加しました。

本学では松本教授の指導の下、学生たちがミュージック・コンクリートの作品作りを本格的に学ぶようになり5年が経過しました。新しくなった環境で更に独創的な作品が生まれることが期待されています。

# 日本伝統音楽研究センターのネットワーク整備

日本伝統音楽研究センター 非常勤講師(情報管理員) 東 正子



日本伝統音楽研究センターで、「情報管理員」という職名で働き始めて、足掛け3年が過ぎようとしています。簡単にいうと、「コンピューターまわりのお守り一切合財」をする仕事ですが、ハードウェアの整備からソフトウェアの管理インストール作業、ネットワークの整備、そしてホームページの更新作業やデータベースの公開にかかわる作業まで、多岐にわたっています。また、複雑な機器の設定や動作のトラブルへの対応といったメンテナンスを行って、日常のさまざまな研究業務をサポートしています。

さて、平成12年に設立された日本伝統音楽研究センターでは、コンピューターによる情報管理や情報提供の重要性を、早い段階から認識してきました。現在、他の研究機関と比べて行き届いていない点多々ありますが、内外の利用者のために、鋭意、ネットワークによる情報公開のための整備を進めているところです。

当センターのウェブ上で皆さんにぜひ試していただきたいのは、「収蔵資料データベースARTIZE」の検索機能です。たとえば、検索窓に「箏」と入力すると、箏に関わる図書・譜本・楽器・音源・映像など様々な種類の所蔵資料が、一括となって表示されます。ワンクリックで、「箏に関わる総合的な情報」にアクセスすることができるわけです。これは他機関でも例が少なく、当センターの特徴となっています。そのほか、「現代邦楽放送年表」という独自の研究成果に基づくデータベースをはじめ、今後も新しい研究資料の公開を計画していく予定ですので、ご期待ください。

日本伝統音楽の研究とコンピューターとの繋がりには遠いように思えますが、そんなことはありません。インターネットによる情報検索はもとより、従来の紙媒体やマイクロフィルムによる研究資料は、電子画像や電子テキストに変換が進められていますし、昨今では、日本伝統音楽の音源や映像も、コンピューターに取り込んで処理や蓄積を行う機会も多くなりました。一方、それらがネットワーク上で盛んに流通するようになったために、著作権に関わる問題の複雑化といった新たな社会問題も発生していることは、周知の通りです。こうした時代の流れを柔軟に取り入れながら、電子ネットワークの整備をさらに進めるために尽力していきたいと思っています。

データベース URL [http://neptune.kcuu.ac.jp/index\\_artize.html](http://neptune.kcuu.ac.jp/index_artize.html)

日本伝統音楽研究センターホームページ URL <http://jupiter.kcuu.ac.jp/jtm/>



本館のホームページは平成13年3月に開設した。残念ながら日本語版のみである。設置目的は本館の活動告知だが、単なる広報にとどまらず、より豊かな文字情報の提供に努めるようにしている。

トップページは告知を中心に構成している。収蔵品の学外貸出情報は、展示施設狭小などの理由により、学内で公開されることが少ない資料を紹介し、本館収蔵品の価値を再認識する場としている。また、リンク集は国内の美術系大学と大学博物館のサイトに張り、大学博物館としての位置づけを明確にした。

コンテンツは陳列室、収蔵品、館概要、資料室の4つのグループに分け、それぞれの概要は以下のとおりである。

陳列室－収蔵品展の会場と展示内容を紹介するページである。各年度ごとに、展示計画を示し、収蔵品展の開催ごとに、会場で配布する展示目録や開設類と同等の内容を掲載する。来場前に展示内容を確認できることや、目録のHTML化により、googleなどの検索エンジンから収蔵品への到達を容易にしている。会期終了後も展示目録は公開されているので、収蔵品目録としても利用できる。

収蔵品－本館の収蔵品を紹介するページである。収蔵品をカテゴリ別に解説し、収蔵品の概略が把握できるようにしている。ただし、収蔵品画像には著作権の問題を持つものが相当数あり、ホームページ公開になじまない性格があるので、積極的な公開は控えている。平成17年からは、資料の基礎データをカテゴリ別にまとめた目録を公開するようになり、現在5つの目録によって1700点あまりの資料データが公開されている。

館概要－本館の概要を紹介するページである。館の規定集や、年報及び収蔵品目録などの刊行物案内を置いて、館外からの資料利用を手助けする窓口としている。

資料室－大学や収蔵品に関する資料を公開するページである。画学校以来の歴史をまとめた略年表は、京都府画学校から現在の沓掛校地に至るまでの校名校地の変遷や、歴代の学校代表者の変遷をまとめた一覧とともに使用することで、本学の歩みを概観するのに便利である。また、平成16年度から本館の収蔵品に関わる美術家の略伝を収録するようになった。一名あたり250～300字程度と短くまとめたものだが、大学との関わりを明確に示すようにしている。そして平成17年度からは、収蔵品目録の公開に伴い、目録そのものをCSVファイルで提供することにした。予算に苦しむ中、本館の収蔵品内容から考えて、低コストで行えるデータソースの提供は、有効なサービスと考えている。

## 教員の紹介



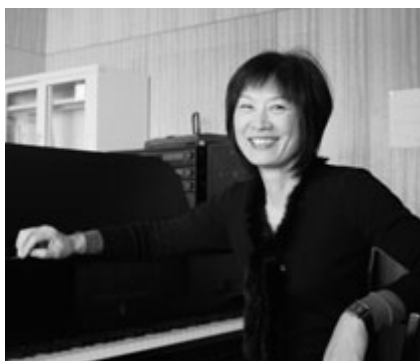
中橋 克シゲ

この4月から彫刻専攻に勤務している、中ハシクシゲです。

後期授業も始まり大学祭も経験し、この大学の授業形態、学生気質にも慣れてまいりました。私が彫刻の学生だった頃から比べると、男女比が正反対になり圧倒的に女学生が増えています。けれども概して質実剛健?で、重い石膏袋を黙々と運ぶ様子は、いわゆる現代の女子学生の気質からは一線を画しているように見受けられます。それに応える教員ですが、博士課程の審査に対して取り組む様などは、125年の大学の歴史が持つプライドが感じられ、他大学から来た私には驚くばかりです。

さて、来年10月に予定されている本学初の国際会議、“芸術がデザインする平和の形”において、イスラエルの作家ミハ・ウルマン氏と並んでワークショップを担当することになり、重い責任を感じています。ワークショップでは、夏期休暇中に近隣の住民や本学の学生を集めて、マーシャル諸島にある核廃棄施設ルニットドームをモチーフとした作品を制作する予定です。皆様のご協力をお願い致します。

(美術学部助教授 中橋 克シゲ)



松田 康子

この10月より京芸で教え始めて、33年ぶりに日本滞在となり、自分の中でバランスをとるのに一生懸命な毎日です。それ程、私にとってヨーロッパで身につけた習慣、生活のシステム、風習、意志、感情表現等が異なる為です。京芸音楽学部の素晴らしい同僚達、そして学びたいと目を輝かせている学生達を前に、期待で胸をふくらませています。しかし、初回レッスンでは、ピアノ研究室の回りからくる色々な音にびっくり。啞然とした私は、こんな中でどうして学生は音を創造していくことができるのかと疑問を持ちました。町中にも雑音があふれています。伝統ある美しき世界の京都。その名を持つ芸術大学にふさわしいより良き環境が早く出来ます様に！

(音楽学部助教授 松田 康子)

## 教員の紹介



藤田 隆則

私自身が研究の上で大切にしていることは、「もっともよくわかっている人が、もっとも簡潔に表現できる」という言葉である。

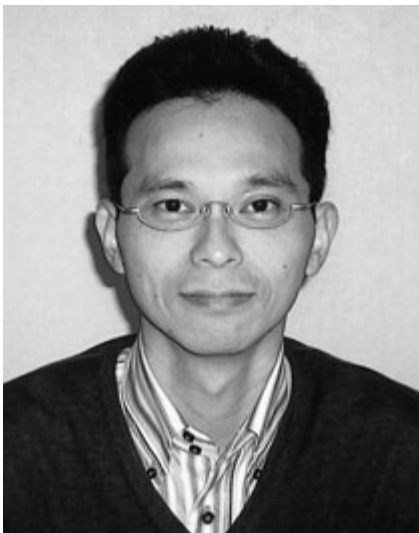
10年以上前、ある民俗芸能を見に行ったときのこと。深夜。屋外。寒中。遠来の観客が火にあたりつつ、ワンパターン演技にいささか退屈し、雑談する。

私の向かいにいたのはドイツ人。日本語が達者である。会話は学問論になった。彼がいきなり言いだした。フランスの学者や日本の学者はダメだ、と。オイオイまたはじまったよ。ドイツ人の悪いクセだ。私は当時、理論が観察に先行する、何人かのドイツ人研究者に辟易していた。また来たぞドイツ人。彼はつづける。なぜフランスや日本の学者がだめなのか？

それは、偉い学者が入門書を書かないからだ。ドイツはちがうぞ。学者は。偉くなればなるほど、入門書を書こうとする。そして上の言葉、「もっともよくわかっている人が、もっとも簡潔に表現できる」。

天から閃光がさした。忘れられない。

(日本伝統音楽研究センター助教授 藤田 隆則)



川嶋 渉

日本画をはじめて丁度20年目の節目の年に、この大学へとやって参りました。

20年前、私が日本画をやりはじめたあの頃感覚。臍気ではあるものの少しずつ思い出しながら、それを手掛かりに学生と向き合う毎日を過ごしています。考えてみると、私と学生との年の差が20年。日本画の教授の先生方と私の年の差もほぼ20年ほど。教授の先生方と学生諸君との丁度あいだの年にあたる今、私に出来る事は何か、そして今にしか出来ない事は何なのかをしっかりと考える必要があるのではと感じています。

あっという間に過ぎてきた20年。しかし今からの人生、もう少し丁寧に歩いていこうかと考えています。今から20年もたてば、今私が担当している学生の中から、この大学と一緒に働くことになる学生が生まれるかもしれない。そんな事を考えるとそうせざるをえない今があるのです。大切な人生のスタートです。

(美術学部講師 川嶋 渉)